

七

あはれまぐれよ天の原  
注ぐなみだのつもりなば

路傍の墓 (課題)

月にうかれて迷ひゆく

人ざと遠き道のへの

考木の松の下かげに

人のかたらふ聲すなり。

「ひまゆく駒の足はやみ

いつか十とせは過にけり

この下蔭をまめにしは

きのふとこそは思ひしか。

「思へばつらしひと心

あやしむかしにひさかへて

今はとぶらふものもなく

あれゆく床のうたてしや。」

「世の人みなはこずもあれ

仇しが原もうるほひて  
更にみどりやにはふらむ

皎々子

千草の花はどしどしに

月のひかりはよななかに

かはらず此處に尋ねきぬ。

「露なうらみそ人こゝろ

うつろひ易きがならひなり

こよひの月のさやけきに

いざや歌はんもる共に。」

「おもしろの夜半のけしきや

月きよく雲もかゝらず

飛ぶ雁の數さへ見えて

目もはるに光くまなし

今宵こそ葉月望の夜

などわれとなれをめし夜ぞ

人はよしつれなくとも

かはらじな二人がなかは  
いつ迄もいつく迄も。』

梢をわたる秋風か

草葉にすたく虫の音か

うたふ聲音もかすかにて

とぎれくくになりにつけり。

やがてもあくる東雲の

舞姫 (課題)

さくも妙なり東うた

まらべゆかしき糸竹の

音もすみわたる金殿に

拍子そろえて舞ふ少女

さてもやささき其すがた

玉のかんざしうす衣

眉かく黛も遠やまに

色さる燕脂うすもみぢ」

舞ふや少女のあだなりや

朝日の光さすなべに  
人のけはひはあらずして  
二つの墓ぞならびける。

訪ひくる人もあらねばや

幾世の雨にさらされて

見るもあはれに荒れにけり

えるしの石も朽ちぬまで。

なびく風情は春の日の

風にたゆたふ青柳の

それかあらぬか福利の氏の

衣のそでを打ちたれて

あなやすらけと祝ふなる

こは音ゆかしき鶯の

さえづるさまど面えろき」

いにし昔を思ひ出の

月桂の身をわけて